

限定配布！！

和の成功法則・伝承者による書き下ろし秘伝書

日本の叡智を呼び覚ませ！

『誰も書かなかった日本人のための成功法則』
く言葉はこうして実現する



和の成功法則・伝承者 大野 靖志（おおの やすし）

日本や世界の公的機関、重要機関、特殊機関や世界の要人・セレブリティなども相談に訪れる 世界最先端の言語エネルギー研究機関・Z研究所統括役員。

早稲田大学商学部卒。石油会社、翻訳業、出版社役員を経験し、現在は一般社団法人、財団法人で理事を務める他、複数の会社経営に携わる。

ユダヤ教をはじめ世界各国の宗教と民間伝承を研究後、白川神道、言霊布斗麻邇の行を通じ、新たな世界観に目覚める。

現在は、二〇一三年の言語エネルギーメソッドの解禁を受け、日本から、次世代の現象界・意識界のリーダーを輩出するビジョンのもと、古神道と言語エネルギーの秘儀を一般の人が誰でも正しく使えるよう、執筆活動、勉強会、次世代言語の開発などを通じて、普及に注力している。

限定配布！！ 和の成功法則・伝承者による書き下ろし秘伝書
日本の叡智を呼び覚ませ！

『誰も書かなかった日本人のための成功法則』
言霊はこうして実現する

0. プロローグ
1. 成功哲学というビジネス
2. なぜ西洋の成功哲学はうまくいかないのか
 - (1) 「やり方」と「あり方」を混同する日本人
 - (2) 日本人と西洋人は全く別の人種である
 - (3) 知識を積み重ねることのワナ
3. 「西洋の成功法則」で成功するための法則
4. 「西洋の成功法則」で語られていないこと
 - (1) 「あり方」の大切さを知っているユダヤ人がいる
 - (2) 西洋式の成功による負の波及効果
5. 日本人を理解する
6. 捨てることの極意（ゼロになること）
 - (1) 「捨てる」とことは「生きる」と
 - (2) すべてを「捨てる」と見えるもの
 - (3) すべてを「捨てる」祓いの道
7. 日本人のための成功法とは（言霊と産霊）
 - (1) 神道と仏教に学ぶ
 - (2) すべてを捨てて「空」になる
 - (3) 江戸時代の骨董商に学ぶ
 - (4) 「空」から言葉を出すということ
 - (5) 確信のある言葉を出すために
 - (6) 本当の自分を知る、そして祓う
 - (7) 神道とは神と人とのコミュニケーションプラットフォーム
8. 新しい時代の成功法（五次元とコンピュータの活用）
 - (1) 知識の世界と体験の世界
 - (2) アナログとデジタル
 - (3) 世界はデジタルで動いている
 - (4) 言葉を機械で発信すること
 - (5) 今、なぜデジタルなのか？
 - (6) デジタルで成功すること
9. エピローグ

本稿をお読みになる前に..

本内容は、西洋の成功法則を否定するものではありません。西洋がダメだから次は日本のこれということでは、全く同じ土俵（階層）で勝負をしていることとなります。「和」とは「統合」のことであり、今回お話しする内容は、ある意味、その上の次元階層から、これまでにあった欧米の成功法の上書きをし、高度化するものです。皆様がこれまで吸収された西洋の知識も決して無駄になることはありません。同時に、日本民族が他の民族より優れていると訴えるものでもありません。日本語に秘められた古代の叡知を皆様と共有し、それを現代に通用する形にするために、世界の人々と共に考えるという姿勢を大事にしたいと考えております。

0. プロローグ

「言霊（ことだま）」という言葉を、誰でも一度は聞いたことがあるかもしれません。日本は古くから「言霊の幸（さき）わう国」といわれてきました。

「言霊」とは何かを人に聞いてみると、「アイウエオ」とか、「声（音）の振動」などといった答えが返ってきます。また、それが「ありがとう」のような「言葉」そのものだという方もいます。

しかし、そのどれもが正解であり、間違いであるということができません。

一つはつきりしていること、それは、いわゆる成功するすべての人が、知ってか知らずにか、言葉の力を有効に活用しているということです。

こうした成功者の中には「イメージを描け」という方もいます。しかし、イメージの前には必ず言葉があります。たとえば、バナナのイメージをするのに、言葉なしにいきなりイメージすることは可能でしょうか。

イメージは、それを指示する言葉が先行して初めてできるものです。「こうありたい」という言葉がなければ、成功のイメージも出てきません。

現代はネット社会であり、そこには様々な言葉が氾濫しています。そこから本当に有益な情報を得るのは簡単ではありません。しかし、玉石混交の情報が即座に飛び交う、このネットシステムだからこそ、起こせる奇跡があります。

一般的にはあまり知られていませんし、信じられないかもしれませんが、実はこのような時代が来ることは予想されていた。『キリストの再臨』『仏陀の下生』といわれるものがそうです。それは、キリストや仏陀のような人物が実際に現れるという意味ではなく、「真実の情報」がもたらされるという意味です。

仮にそうした人物が現れたとしても、人々が欲しいのは、実は、現れたという安心感ではなく、そこから得られる情報です。イエスの口から出る真実の言葉（マナ）を求めているのです。

こうした聖人たちの言葉は、後の権力争いのため、為政者や弟子たちによって歪められ、あるいは消されて、現代に伝わっています。そのため、今となつては、ほとんど暗号を読み解くような力がないと、彼らが本当に伝えたかった中味はわからなくなっています。

「言霊」の真義は、これまで宮中の奥深く、あるいは古い歴史を持つ神社や結社に封印されてきました。しかし、こうした時節の到来により、その封印も解かれ、「言霊」の真の姿が明かされようとしています。

その真の姿とは、形とか音といった表面的なものではなく、ミクロの世界から広大な宇宙までの成り立ちを説明できるシステムそのものであり、私たちの生きている四次元世界を超える万物の法を示すものです。

それが今という時代に開示されるとはどういうことでしょうか。少なくとも、単に時期が来たからという単純な理由ではありません。それなくして人類の未来はないという、幾分深刻なものです。画期的という表現がありますが、まさに期を画する「剣」のような存在です。

もちろん今までも「言霊」に関する書籍や言い伝えはあったかもしれませんが、しかし、それらは、個人的な直観であるか、封印の隙間からかうじて漏れた情報を拡大解釈したものかもしれません。けれどもそれにより、「言葉」ではない言葉が今日まで生き永らえることができました。

本稿はその「言霊とは何か」の答えを探る旅であり、人類と共に自らの栄光を掴むための手引書にもなっています。聞き慣れない表現も多く出てくるかと

と思いますが、ここでお伝えしたい「何か」を掴んでいただければ幸いです。

ただし、大切な部分だけ先にお伝えします。言葉が実現するとは、賭けでも偶然の産物でもなく、一つの法であり「システム」であり、そうした仕組みが厳然として存在することです。

1. 成功哲学というビジネス

世の中には西洋も東洋も含め、様々な成功法則が存在します。恐らく、本稿をお読みの皆様も、既に様々な成功法を試されたことでしょう。しかし、それで本当にうまくいったという方は、もはやこうした文章にはご縁のない方であり、既にここにはいないはずです。

「成功」という言葉の響きは、非常に耳触りのいいものですが、そこには微妙な問題もあります。それは、何を持って「成功」とするかです。お金がこれだけあれば、事業がこれだけ成功すれば、あんなこと、こんなことができれば、など、人により定義も様々です。

けれども、それらを簡単に表現するとこのようなことではないでしょうか。それは、どのような形を取ろうと、「自分の思いが実現する」ということが「成功」の条件ではないかということです。結局、成功法則や成功哲学といわれるものは、ただそれを言っているに過ぎません。

成功哲学というと、皆様ご存じのように、西洋から来たものがほとんどです。有名などころでは、ナポレオン・ヒルから始まり、現在も絶え間なく出版される成功本は、たいていが米国発、もしくは、カタカナの作者名で書かれています。

では、こうした西洋の成功法則を試してみて、いわゆる「成功」したという方はどれくらいいるのでしょうか。確たる証拠はありませんが、九割以上の方々は結果を出せずにいるのではないのでしょうか。逆に、結果が出ないことで、こうした成功法の市場はますます活気づいているようにも思えます。

そのように考えますと、こうした成功法でうまくいくのは、セミナーでの人集めに成功した成功法の提唱者か著者であって、(ごく一部を除き)それらを真面目に実践する人ではないのかもしれないかもしれません。

ただ誤解のないように申し上げますと、既に書籍やDVDになっている成功法則が間違いであるといっているのではありません。「思考は現実化」するのは当然であり、基本路線はその通りといえます。問題は「では、どうしたらそうなるか」の部分にあります。

西洋の法則ではこういます。「まずは成功のイメージをせよ。そして、それが叶ったつもりで行動せよ」と。更に、アフアメーション（同じことを繰り返し念じること）でこうしたイメージを強化しよう訴えます。

恐らく、今これを読まれている皆様の大多数は、取組姿勢の如何を問わず、こうしたことに何度かチャレンジされたことがありませんかと思えます。長く続いた方もいれば、すぐにやめてしまった方もおられるでしょう。

2. なぜ西洋の成功哲学はうまくいかないのか

（1）「やり方」と「あり方」を混同する日本人

「思考は現実化する」、これは間違いのない法則です。実際にこの法則に従って、これまで何人もの人々が富と財を築いてきました。また、富という目に見える形でないにせよ、それにより精神的・心理的な満足の下、一生を送ることができる人もいます。

けれども、それができるのは、ごく一部の人のように見えます。

様々な言語で翻訳されているため、この法則そのものを知っている人は世界全体で相当な数に上ると思われれます。つまり、そうした本が売れているのであれば、買った人は皆知っているといえるからです。

実現する人とならない人・・・一体何が違うのでしょうか。ある本ではこのように言います。「こちらのいう手順を省いているからだ」「取組みに真剣度が足らないからだ」「それを本当に信じて取り組まないと効果が出ない」など。本の内容ではなく、読者の姿勢に問題があるというわけです。

しかし、本の内容には問題がないのでしょうか。本当に成功するための手順を惜しみなく披露しているのでしょうか。あるいは、著者が本当にそれを知らないのでしょうか。

実は西洋から来る成功法則は、本来必要なことの半分しか語っていません。いえ、本来必要なことが90%とすると、残りの10%をもっともらしく語っているだけです。その「本来必要」なこととは何でしょうか。

「思考は現実化する」という言葉を聞いて一般の方が思うのは、「どう思考したらよいか」ということであり、続いて「それによりどう行動したらいいか」ということです。よって、思考のテクニックや行動のテクニックがこの世界では重要とされます。

問題は、それでもうまくいく人がいるということです。一過性であっても、そのような人がいると信用せざるをえません。当然自分も“やり方次第では”同じことができるはずだ、ということになります。

今ここで、「やり方次第では」と言いました。実はここに「思考は現実化する」を実現するための逆説的ヒントがあります。皆さん、「やり方」を欲しがっているわけです。その「やり方」を知るためにお金を払ってでも、そうした情報を手に入れようとするわけです。

「やり方」とは「こうすればいい」ということですが、たとえば、「ここにやる土を一トンほど、あそこの穴に埋めてみなさい」という指示があったとします。もし、自分が小さなスコップを持っていたら、大変な時間がかかることになります。けれども重機があればあっという間でしょう。

つまり、「やり方(DOの世界)」は同じでも、「あり方(BEの世界)」によって、その進め方や時間が全く異なるということです。「あり方」とは存在の仕方です。先の例では、「肉体の身体にスコップを持った自分」と、「重機を持ち、それを使える自分」という違いがあります。

ここで何を言いたのかといいますと、「やり方」をいくら論じても、「あり方」を正しい形で確定しない限り、全く意味のない話になるということです。

女性に「女性の服を着て街を歩け」という指示は、女性には極めて簡単なことだろうか当たり前のことですが、男性に「女性の服を着て街を歩け」と言った場合、それがスムーズにいくかいかないかは、考えるまでもないことです。恐らく指示通り歩くことはできても、ぎこちない動きになることでしょう。

(2) 日本人と西洋人は全く別の人種である。

では、ここで本題に戻ります。西洋の成功哲学とは誰のためのもののでしょうか。元々英語で書かれている本です。それは誰が読むための本でしょうか。答えは簡単です。結局、欧米人のための成功哲学であり法則だということです。

戦後、国際化の波に乗って、今では町でも普通に外国の方の姿を見かけますし、田舎ですら珍しいことではありません。逆に都会では外国人がいることを気にも留めない状況です。いわば、私たちは、そうした国際化の波にもまれて、日本人も外国人も、いわゆる西洋系のアングロサクソンといわれる人種の人々も同じ人間であり、「肌の色と言葉が違うだけで、そうは変わらないのではないか」という不感症のような状態にあるのです。

こうした流れの中、文化も食事も思考様式も西洋風になり、今では着物を着て街を歩く人は、特別な仕事の方を除いてほぼ皆無です。英語も小学校から習えるようになり、英語しか使えない日本の企業も出てきました。むしろ、「文明化とはいかに西洋の真似をするか」で構築された文化になっているため、西洋的な外見や考え方をする人が進んだ日本人という考えすらあります。

こうして、「西洋の成功法則は日本人がやっても同じ」という勘違いを生むベースができました。恐らく今も西洋のそれを必死になって探している人がいるはずです。

先ほど、「やり方」がどうあれ、「あり方」が確定していないと先に進めないというお話をしました。日本人の「あり方」と西洋人の「あり方」は同じでしょうか？ 「ここである」「あり方」とは、その人の「魂」も含めてすべてという意味があります。

「思考は現実化する」のは事実です。しかし、その思考をする人が誰であるか、そこは極めて重要な問題ではないでしょうか。日本語をしゃべり日本人特有の情緒を持った存在と、英語をしゃべり強いものが勝つという弱肉強食の掟を常にする存在と、「あり方」はいっしょでしょうか？

そうです。どんなに西洋の成功哲学を学んでも、そもそも「あり方」が違うわけですから、「やり方」をいかに精緻に、一生懸命実践したとしても、西洋人

と同じ結果は出ないのです。

(3) 知識を積み重ねることのワナ

「あり方」を忘れて「やり方」を偏重することには、もう一つの問題点があります。それは、「やり方」さえわかれば何か変わるだろうという期待から、様々なノウハウやテクニクを身に付けてしまうことです。そこにはいつか本物の「やり方」に出会えるかもしれないという期待もあります。

もちろん最初からテクニクの収集家ではなかったはずですが。しかし、あれもダメ、これもダメと失敗を重ねるうちに、本人も気づかないうちにそうした役に立たない知識が山のように積み重なり、自由な考え方や動きを阻むようになります。

その結果、最新の成功法則があれば、条件反射的に、高いお金を払ってでもそのノウハウを手に入れようとします。その時に自分の「あり方」には何の変化も起きていません。下手をすると、「いつまでもダメな自分」という「あり方」がより強化されることになります。

ここでの問題点は二つあります。一つは、知識を積み重ねることで「やり方」偏重になり、より歪（いびつ）な「あり方」の自分ができてしまうこと。もう一つは、無駄な知識Ⅱ、ゴミを身にまとうことにより、本来の人間力なり直観力が発揮しにくい状況を作ってしまうことです。

世間一般的には、知識がありノウハウがありテクニクがあると、多少の評価は受けるかもしれません。また、そうした蘊蓄（うんちく）から「あの人はすごい」と言われることもあるかもしれません。けれども、そうした積み重ねが評価されるのは、伝統的、常識的な既定路線の範囲内であり、実践とは別の階層にあります。

また別の例を出しましょう。たとえば、日本の武道です。現在は、柔道何段とか剣道何段などという言い方をしますが、それはスポーツが西洋から入ってきてからの話であって、日本の武術や芸道には元々、極意を得たかどうかの二パターンしか存在しませんでした。つまり、「免許皆伝」であるか「そうでないか」の違いです。

今や武道も、スポーツ柔道とかスポーツ空手などといわれて久しいですが、「免許皆伝」になっていない世界で、何級とか何段といっているだけで、その世界では「やり方」をどれだけ覚えてどれだけ上手くやるかが問われます。つまり、蓄積方式で段位・級位が決まるということです。

ところが、こうした現代の武道でいくら段位を取っても、命懸けの戦いにおいては、何の役にも立たないことが多いようです。かえって、自分が習った動きに縛られて、素人に不意打ちを喰らい、倒れてしまったという例も珍しくありません。

それは考えるまでもなく簡単に想像のつくお話であり、いわゆる名人になるほど、能の「守破離（しゅはり）」の教えのごとく、最初は基本を守り、それを破り、そこから離れることで自在性を得るものです。要するに、「やり方」から離れて、「あり方」の世界に移るということです。自在性、それは自由な「あり方」を示すものです。

これは、知識やテクニクの蓄積だけを言っているわけではありません。必要以上にお金を貯めるといふ行為や、肩書、武器で身を守るといふ行為も同じようなものです。そこには、「不安な自分」という「あり方」が潜んでおり、それに気づかない以上、「やり方」で勝負するしかありません。

3. 「西洋の成功法則」で成功するための法則

これまで「やり方（DOの世界）」と「あり方（BEの世界）」のお話をしました。日本人の「あり方」については、次の章でお話したいと思いますが、西洋人のそれはどのようなものでしょうか。

結局、西洋式の成功法則で成功するためには、西洋人の「あり方」と「やり方」を両方持っていないではなりません。欧米では、既に「あり方」がそのままで、ことさらにそこを強調する必要がありません。

その西洋人の「あり方」とは、「人間は神になれない」という考え方や「性悪説」、「原罪説」に基づくものであり、「狩猟民族型」「弱肉強食」「欲の正当化」、「目的は手段を正当化する」などの思想が染み付いた民族でもあるといえます。

※日本の縄文時代における和を大切に動植物を敬う「狩猟採取型」とは意味が異なります。

一言でいいますと、西洋人の「あり方」、それは「強欲」だということです。（もちろん、全ての方がそうだというわけではありません。わかりやすくするため、あえて極端に定義しています。）これは世界の歴史を紐解けば簡単にわかることなので、それ以上は割愛します。

つまり、「あり方」に「欲」というネジがしっかり巻き込まれている状態なので、「あり方」を議論せずとも、勝手に「やり方」を遂行するだけの力があるということです。そのためには、情も何もあつてはいけません。やらないと逆に自分がやられるわけですから。

そのような観点から、日本人が西洋式で成功するためには、「欲」のエネルギーで自分を鼓舞し、ネジをはち切れるまで巻いて、その原動力を行動に生かすしかありません。周りから何を言われようと、多少犠牲になるものが出ようと、気にしてはいけません。

徹底的に「強欲」になること。それが、西洋式の成功法則で成功するための第一の条件です。要するにそのような「あり方」が前提となつて、この資本主義社会における自分の目的を達成できるということです。

ところが、たいていの日本人はこう考えます。とにかくやってみよう。あわよくば、自分も栄光を手にするかもしれない、と。その時に「あり方」とは全く眼中にありません。必死にがんばれば何かいいことが起きるかもしれない、と考えます。問題はそこにあるにもかかわらずです。

一方、このやり方でうまくいく日本人もいます。その根底にあるものは何でしょうか。ボクシングでも同じことが言われますが、それは、「ハングリーさ」という概念です。ただハングリーではなく、「絶対に見返してやる」とか「死んでも人並ではいたくない」「何があつても成功させる」などという、その人の存在を賭けた「欲」を伴うものです。

要するに「あり方」を西洋人の基準レベルまで「欲」に塗（まみ）れさせないと、「やり方」がどうあれ、うまくいかないということです。道元禅師もこういっています。「どんな悪いことであっても、そればかりを思っていれば、必ず実現する」と。「そればかりを思う」、そこに欲望を根拠にした力があります。

西洋式で成功するために必要なこと、それは「欲望のネジが極限まで巻かれた自分」という「あり方」です。「やり方」はその次です。

ここで大事なことは、「あり方」について、「こうあろう」と少しでも努力するのであれば、それは「あり方」ではなく、「やり方」の次元に落ちるということです。「あり方」とは自然体であり、その人が努力するとかしないとかいうレベルではなく、その人のありのままの姿がそれであるといえます。

従って、日本人にそれができないというのは、元々西洋人と「あり方」が違うため、仮に自分が西洋人らしくないとすると、それはただ違うということです。あり、どんなに努力しても「あり方」を変えることはできないのです。

つまり、一切の努力なしに「欲望の権化」にならない限り、西洋式のやり方では成功しないということです。

因みに、「あり方」の階層には、「やり方」とは比べ物にならないぐらい大量の情報が詰まっています。西欧人であれば資本主義や覇道主義の歴史の中で先祖が苦勞しながら積み重ねてきた知恵が、日本人であれば先祖が積み重ねてきた日本人らしさの DNA が入っています。そのような DNA を持つ人種と同じ土俵で勝負できるでしょうか？

4. 「西洋の成功法則」で語られていないこと

(1) 「あり方」の大切さを知っているユダヤ人がいる。

先ほど、西洋式の成功法則で成功を自分のものにするための絶対条件、すなわち「あり方」についてお話ししました。

ところで、西洋の成功哲学で語られていないこと、それは今ここで議論していますように、「あり方」の部分であるといえますが、こうした書物の著者は（多分）本当に知らないで語りようがありません。語らなくとも前提として既にそれは「ある」からです。

では、語られていないもう一つとは何でしょうか。

それは、ユダヤの一部の成功者は、「あり方」の大切さを知っており、その「あり方」を操作する術を知っているということです。それがあまりにも宇宙の根

本法則であるため、ほとんど公表されていません。

その根本法則とは、モーゼがエホバの名前を聞いた時に教えられたという「I am that I am」にヒントがあります。つまり、神とは「I am that I am」であるということです。

これだけ聞くと何のことやら見当がつかないかもしれませんが、この表現は、「我は在りて在るものなり」と意訳されますが、実際には、「私は私を存在させるものである」、すなわち、「私を存在させる存在が神である」といっています。

つまり、神とは「存在」そのものであって、「あり方」の問題だといっているわけです。「あり方」を確定させれば、「やり方」がどうあれ、その通りになるということでもあります。

先ほど西洋式で成功する人の特徴として、「欲の権化」という表現をしました。それは「あり方」の法則を知らなくとも、既にそうなっている人が多いという意味であり、意識的に「あり方」を変えているわけではありません。

一方、ここで申し上げていることは、「やり方」よりも「あり方」が大切であるという大原則を、意識的にしっかり押さえている一部の西洋人もいるということです。

(2) 西洋式の成功による負の波及効果

最近、こうした成功法則のマイナス面も語られているようですが、あまり書かれていないという意味におきまして、念のため付け加えておきます。

とりわけこの資本主義社会においては、弱肉強食が大前提であり、成功法を使うにせよ使わないにせよ、「絶対に成功したい」という強烈な欲望なしでは、この過酷な競争社会を勝ち抜くことはできません。

したがって、「皆からよく思われたい」「人格者でありたい」「けれども成功したい」と思う人ほど、成功者の道具になることはあれ、自らが成功する側になることはありません。もっといえば、西洋式の成功の波に乗るためには、いわゆる人格者であってはならないのです。

それぐらい自分の事業に集中する必要があるわけですが、私たちの住むこの四次元宇宙においては、基本的に質量保存の法則が働いており、その法則から逃れることはできません。つまり、全体量が一定の中で「やるか・やられるか」、「取るか・取られるか」しかないということです。

一見しますと、上部ではきれいなことを言っているけど、「自分さえよければ」という気持ちなしには乗り切っていけない世界です。もっと言うと、「これは、「自分さえ成功すれば、あるいは自分さえ助ければ、他がどんなに犠牲になってもいい」ということでもあります。

実際に、自分の子供を犠牲にして、代わりに事業で成功させるという運命のコントロール法があり、それで大成功したカジノ王もいます。（実際に息子はピストルで殺されました。）そこまでの感覚が普通の日本人にはあるでしょうか？そこまで覚悟した人間と戦ってビジネスで勝てるでしょうか？自分の子供さえ犠牲にできる世界です。ましてや他人であれば尚更ではないでしょうか。

これはもちろん極端な例ですが、成功してお金を稼いだという裏には語られていない数多くの悲劇が存在します。私自身も数多くの事例を見てきました。けれども、成功哲学に関する書籍で、そうした裏面について書かれることは少なく、また悲劇を避ける方法も言及されません。

西洋的な一神教の世界は、日本の多神教とは根本的に価値観が異なります。一つのことを達成できれば、後はどうなってもいいという考えがベースにあるのです。場合によっては、一つの成功のために、それ以上の犠牲を払うことがあります。それは、お金に変えられないものかもしれません。

5. 日本人を理解する

「日本人とは何か」を考えた時に、そもそも日本人とはどういう人種のことをいうのか、疑問が出てきます。そこで、日本人と規定できる条件を次のように考えてみました。

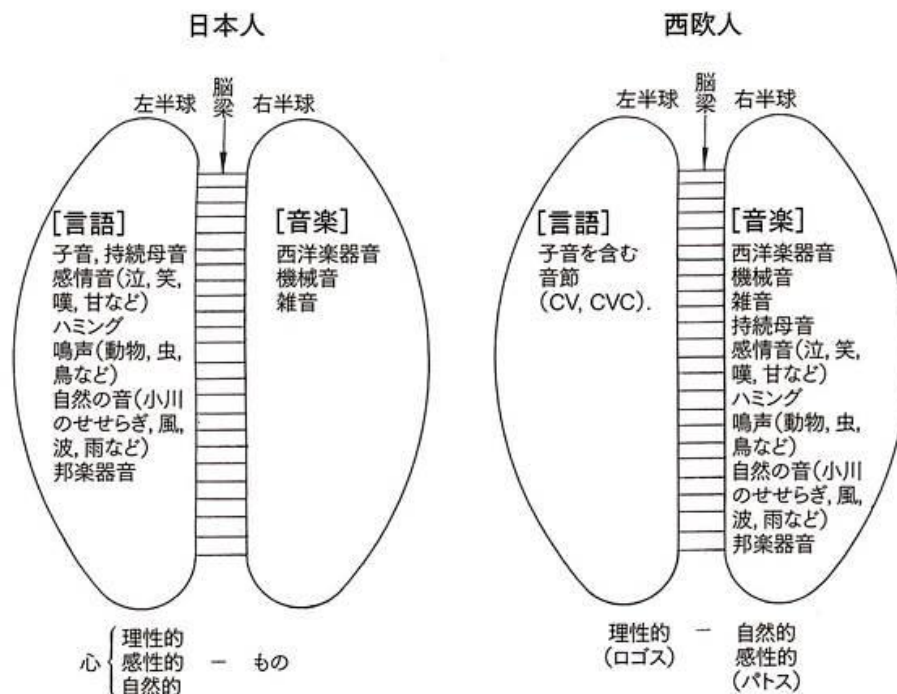
① DNA レベルでの系統分析に基づく日本人（現代の日本に住んでいる人に多くみられる系統）

② 日本語を母国語とする人

③ 法律上の日本人（Ⅱ日本国籍を有する人）

恐らく、これをお読みの皆様は、上の①～③の全てが当てはまる方ばかりだと思いますが、今回話を進めていく上での最低ラインを申し上げますと、②ということになります。生れてから人格形成までの期間、日本語を基調として育ったか否かで脳の使われ方が決定されるといわれるからです。ですので、ここでは②を満たしていれば日本人と呼ぶことにします。

その日本人ですが、1978年に出版された『日本人の脳』（角田忠信著）には、日本人（日本語を母国語とする人間）の脳の特徴がよく出ています。



この図からもおわかりのように、日本人と西欧人とは、自然の音に対する反応が全く異なることがわかります。しかも、先進国の中では、日本人だけが異質

な脳のメカニズムを持っており、朝鮮・東南アジア諸国・インド、香港の中国人等は完全に西欧人と同じ脳のパターンをしていることがわかっているのです。

「この図が示すものはあくまでも音の捉え方の違いのみですが、情緒のあり様を含めそれ以外の感性についても似たような違いがあることは想像するまでもありません。実際、前章でも触れたように、「欲」のあり方や制御の仕方も全く異なるのです。

松尾芭蕉の有名な句に以下のものがあります。

「閑さや岩にしみ入る蟬の声（しずかさや いわにしみいる せみのこえ）」

恐らく、セミの鳴声が雑音にしか聞こえない西欧系の人々には、その声の情感も、ましてや岩にしみ入る様子など想像もつかないことでしょう。しかし、私たち日本人は、普段から何でもない音や光景を言葉として自分の脳や身体に刻んでいます。

ある意味、それだけ外界の状況に敏感だといえます。それがプラスに作用するかマイナスに作用するかはその人次第ですが、少なくともこれだけ感性が豊かだということは、一つのことに専念しにくい面もあるということが出来ます。つまり、自分の欲望の達成だけにエネルギーを注ぐことはできないということです。

恐らく「こ」で話していることは、読者の皆様も本能的に感じ取られていると思います。日本人にとって西洋型の成功を阻むもの、それは実は感性の豊かな自分自身なのです。

より具体的に話すと「こ」いうことです。成功を手中にしたい自分がいるとすると、そこにはある種の倫理観が働きます。「こんな自分が成功していいのか」、「こんなものを売っていいのか」、「騙しではないのか」、「人を蹴落として自分だけがうまくいっているのか」、「お金に目が眩んで他が犠牲になってもいいのか」、「家族はどうするのか」、「周りの人にはどう説明したらいいのか」、など、自身の感性が自分と他者との関係を同列に捉えることで、気持ちがなかなか一つの場所に落ち着きません。

しかし、実はそこに日本人としての「あり方」があります。その「あり方」ゆえ、かつては「日本人の団結力」で経済大国の名を恣（ほしいまま）にし、現

在は経済面における国際競争力が落ちたとはいえ、ノーベル賞受賞者数は世界第七位、上位二十か国のうち、アジア圏（黄色人種）は日本だけという状況を維持しています。（一九〇一年～二千十四年）また、自然科学三部門において二十一世紀に入ってから受賞者数は、米国に次いで現在世界第二位です。

ノーベル賞そのものの良し悪しは別にして、これは日本人の「あり方」が、研究部門において類稀な能力を発揮せしめているという証拠となります。逆に、西洋の成功哲学につながる資本主義との関連において、ノーベル経済学賞を受賞した日本人は未だ一人もいません。ここにも日本人らしさが現れているのではないのでしょうか。

このように、日本人（日本語族）にはきめ細やかな感性があり、それを武器にできれば、それにより傷つき、他者に利用される側面も併せ持つことがおわかりいただけると思います。

もちろん、ここでご紹介しているのは、「日本人とは何か」について、当然のことながら全てを網羅しているわけではありません。しかしながら、日本語をしゃべる人種の「あり方」として、極めて重要なポイントではないかと思われます。

因みに、世界には約六千の言語があるとされますが、母音優勢言語は日本語とポリネシア語だけのようです。詳しくは紙面の関係上省略しますが、日本語には「aiueo」という母音以外に「ksthmyrw」という父韻が存在します。そこから生まれるのが「カキクケコ」や「サシスセソ」といった子音であると言霊学では教えます。

つまり、日本語以外の言語は子音優勢言語であり、父と母に相当する父韻や母音が全体の中で埋もれてしまっているため、いわば母親不在の孤児（みなしご）状態にあるといえます。

ここで、英語にも「aiueo」はあるのではないかという反論があることでしよう。けれども、英語のそれは見た目は同じでも「エイ・アイ・ユー・イー・オウ」という母音の変形版であり、そこから純粋な母音の周波数は生まれません。

こうした言葉を使うとどうなるでしょうか。実は歴史上ほとんど誰も気づいていませんが、使えば使うほど不安になるのです。すると両親（特に母親）不

在による淋しさから、安心できる材料を探しに外へ外へと向かいます。内に向かうことはしません。虚しくなるだけだからです。

日本語族は潜在的にそうした母音言語の恩恵を受けてはいませんが、残念ながら、西洋的な思考方式の定着から、その利点を活かし切れていないように見えます。

6. 捨てることの極意

(1) 「捨てる」ことは「生きる」こと

「断捨離（だんしゃり）」という言葉は二〇一〇年の流行語大賞に選ばれました。その関連本は既に二〇〇万部以上を売り上げているそうです。これは、「貯める」ではなく「捨てる」ことへの大切さに、日本人が気づきつつある徴候を示すように思います。

これまでの西洋的な文明を蓄積型としますと、東洋の思想は老荘や仏教、ヨーガなど積み減らしをベースにしたものが多く存在します。そのほとんどは自分を空っぽにして、世俗の悩みを解消し、純粹自然、あるがままの自分に帰る方法です。

では、日本は今、この西洋型と東洋型のどちらの区分に属するのでしょうか。実はこの両方を併せ持ちます。明治時代に「和魂洋才」という言葉ができたように、「和」の精神を保ちながら、西洋型の文明に合わせることができるといのが、日本人の特徴です。

明治以降の変わり身の早さ、また、戦後の歴史を見ましても、東洋で一番に資本主義文明を自分のものとしています。ある意味、東洋でありながら、西洋の窓口のような国でもあるわけです。東洋と西洋の両方に軸足を置き、東洋にいても、西洋にいてもオンリーワンの立ち位置を失うことはありません。

そうした「あり方」ができるのには、訳があります。たとえば、明治時代です。当時、着物にちよん鬚、刀という江戸時代の姿を見事に転身させたのは、「捨てる」という行為を抵抗なく受け入れたからに他なりません。

これが他の民族であれば、「死刑」を宣告されたに等しく、その後の運命はあってないようなものかもしれません。自暴自棄になり、最後は侵略されて植民

地にされてしまいます。事実、世界の歴史はそうに作られました。

しかし、日本は「捨てる」ということで欧米の植民地になったわけではありません。まるで、「捨てる」という行為が、ただ「失う」という行為ではなく、実は「新しいものを得る」行為だと知っていたかのようです。

これが日本以外の東洋人ではなく、欧米人だったとしたらどうでしょう。こちらも恐らく徹底抗戦になったことでしょう。これも歴史が証明していることです。

日本にまだ軍隊があった時代、日本兵は敵軍の捕虜になることが許されませんでした。「生きて虜囚の辱を受けず」というわけです。その意味は、情報漏えいや残忍な扱いを受けないためという一般的な解釈もありますが、もう一つ別の解釈があります。それは、敵方に寝返ることを防ぐためという理由です。

将棋が中国の囲碁や西洋のチェスと違うところは、自分が取った相手方の駒を自分のものとして再び利用できるということにあります。これが囲碁やチェスだとそうはいきません。取ったら（殺したら）終わりです。

この将棋の駒の例にあるように、戦国時代もむやみに敵を殺めることはしませんでした。むしろ、こちら側に手なずけ、味方にすることで戦力を増強することを考えました。関ヶ原の合戦でも、最後に小早川の一軍が東方に寝返ったことが決め手となり、徳川の世はそこから生まれました。

もちろん敵方に寝返ることは当時の軍紀でも許されることではなかったと思います。しかし、将棋の駒が再び使えるように、総大将の立場にあれば、それを陣取に活かすことは当然作戦の範囲内でした。徳川家康も柳生一族に伊賀、甲賀忍者を束ねさせ、情報操作を行うことにより、敵方を味方に引き入れたのです。

ここで、寝返る側の立場で考えれば、それまでの自分の地位も所領も、プライドも全て捨てるわけです。当然、その後の自分の処遇も考えますが、「捨てる」ことが終わりではないという前提です。つまり、「捨てる」ことが「生きる」とだということです。

剣術の道歌にも、「切り結ぶ 太刀の下こそ地獄なれ 身を捨ててこそ浮かぶ

瀬もあれ」という有名な歌があります。

(2) すべてを「捨てる」と見えるもの

「捨てる」ことは「生きる」ことと申し上げました。ただし、これは「捨てる」ことのメリットを少し粗く語ったに過ぎません。

「捨てる」ことといえば、禅の教えを思い出す方もおられるかもしれませんが。禅は仏教であり、元はお釈迦様から達磨大師を経て中国に伝わったものです。その系譜は、六世紀から十三世紀まで中国の僧に伝承され、その後は日本で花開くこととなります。

つまりその段階で日本がそれまでの禅の歴史を総括するわけですが、単にメッセンジャー的に同じことを繰り返すのではなく、そこに日本人(＝日本語)の感性によるアレンジが加わるわけです。もちろん本質を変えずに、です。

たいてい仏教やお寺というと、手を合わせて仏像や本殿を拝むものという認識であり、お坊さんは頼りになる拝み屋さんというイメージがあるように思います。しかし、仏教が本来目指している境地はそこにはありません。

般若心経の中に「色即是空(しきそくぜくう)、空即是色(くうそくぜしき)」という表現がありますが、これは元々自分という存在は「空(くう)」であり、そこから様々な縁によって「色(しき)」「(現象界)」が生まれるということ、最終的にはその元となる「空」(空っぽだが全てがあるという存在の源)を体感し、また体現しようとするものです。

その「空」になるための直接的な指導法が禅にはありました。行き着く先が同じであっても、伝え方は様々あり、方法論の違いにより曹洞宗や臨済宗などの宗派ができました。もちろん、禅とは別の浄土宗や日蓮宗など他の仏教諸派も、この「空」を前提にした教えであることに違いはありません。

こうした仏教の教えが、最後に日本で花開いたとはどういうことでしょうか。歴史的に日本という国が奈良時代に仏教を取り入れ、政治的にそこに力を入れたのは事実です。しかし、それだけで簡単に定着するものではなく、ましてや繁栄するものでもありません。

その理由として、日本語族がどういうわけか「空」を理解しやすい民族であったということが挙げられます。なぜ中国の僧から日本人の僧に究極の教えが託されたのでしょうか。恐らく時代背景もあるとは思いますが、当時の中国にはもはやその精髓を理解できる人物がいなかった（あるいはご縁がなかった）のでしょう。その後の系譜は現在も日本で続いています。

話は歴史の脇道に逸れましたが、すべてを捨てると見えるものとは何でしょう。実はすべてを捨てると、そこに禅僧の探し求めていた「空」が現れるのです。ただし、この「捨てる」という表現が実は曲者（くせもの）で、最後に「捨てる」というかすかな意志と、捨てた後の自分を見たいという、極めて気づきにくい欲望が残ります。が、それすら捨てないといけません。

結局のところ、日本語をしゃべる日本語族という種族は、「空」になるのが得意であったということです。最近では悟ったお坊さんも大分減ったようですが、数は少なくとも、その精神的遺伝子が未だ日本にあることは、是非知っていたきたいポイントです。

なぜここですごく「空」のお話をするのかといいますと、「空」が願望実現の源泉であるからです。この源泉につながらない言葉は実現しません。言い方を換えれば、私たちが住む四次元世界を変えるためには、四次元を抜け出た「空Ⅱ五次元」の力がどうしても必要になるのです。そこに触れずして、どんな言葉がいいのかという議論は虚しい努力です。

※四次元Ⅱ三次元という空間に時間を加えた概念。

（3）すべてを「捨てる」祓いの道

さきほど「すべてを捨てれば空（くう）になれる」といいました。しかし、口でいうほど簡単なことではありません。禅の世界でも二十年、三十年かかって到達できればいい方であり、そこには探求の深さの問題、また、あまり知られていませんが、遺伝子や業（カルマ）の問題も含まれます。つまり、すべてを捨てるとは、先祖の記憶や魂の記憶も消去するということだからです。

それはともかくとしまして、仮に本当にすべて捨てるということでなくとも、「捨てる」ことに抵抗のないのが日本人の特徴です。つまり、捨ててもどこかしら大丈夫と思える民族であるということです。第二次大戦後の復興も、いくなればゼロからのスタートです。ゼロからではありませんでしたが、復興の「意志」

はありました。

では、この「意志」はどこから出てくるものなのでしょうか。それを知るためには日本の歴史をもう一度俯瞰（ふかん）する必要があるそうです。それも歴史の表面だけでなく、裏も含めなくてはなりません。なぜなら、歴史とは常に勝者によって書き換えられるものだからです。

そのようにして見ていきますと、日本には六世紀に仏教が入る前、既に神道が存在しており、縄文時代にはシャーマニズム（神懸り）を含む神道的な祭祀が行われていたことがわかります。（「神道」という言葉は明治時代以降の造語ですが、表現を変えるとわかりにくいので、「神道」に統一します。）

つまり、元々神道のベースがあるところに仏教やキリスト教、西欧の思想が入ってきたということであり、和魂洋才のように、後から入ってきた知識を「和」の心で融合していったということです。「和魂洋才」の元の言葉は「和魂漢才」です。これは、どこまで遡っても「和」をベースにして日本の文化ができていったことを意味します。

「和」という言葉は、「やわらぎ」を意味するものであり、そこには「排除」や「分断」といった言葉とは逆の、あいまいさ、まろやかさがあります。すなわち「統合」の意であり、一神教にはない、八百万（やおよろず）の神々を彷彿させる世界です。「和」は「輪」であり、すべてを統合して輪＝円を完成させるという根源的な意志の現れでもあります。

その「和」がどこから出てくるのか、そこが問題です。その答えが「空」にあります。一見矛盾するようですが、「和」というと何でもかんでも出てきたものを統合するという意味に取れそうですが、そうではないのです。

「ここである」「和」の世界とは、先ほどもお話ししましたように、円の完成のために必要なものを「統合」ということであり、そこには取捨選択という判断が伴います。その冷静な判断を行う足場が「空」にあります。そこには先入観も偏った価値観も何もありません。澄み切った世界です。

その透明な世界と「和」の世界は階層における上下の関係にあり、魂レベルでは、「和魂（にぎみたま）」と「荒魂（あらみたま）」という表裏一体の関係に落とし込むことができます。つまり、「和」の表はやさしく、裏は荒々しいとい

うことです。別の言い方をすれば、「創造」と「破壊」を兼ね備えているということ。取捨選択のためには、その両方がなくてはなりません。

少しややこしいので整理しますと、①「和」とは何でもかんでも統合するものではないこと、②そこには取捨選択が伴うこと、③エネルギーの源泉に戻って正しい判断をするために「空」という澄み切った世界に行くこと、が大切であるということです。

「和魂洋才」の時代においても、まずはそれまでの日本式を捨てて西洋のあり方を全面的に受け入れて見る、そして、日本人に合ったもの、これからの日本に必要なものを選び、不要なものは捨てるという判断があったはず。そして、新たな見地から、一旦は捨てた日本の古いやり方も、必要に応じ復活させるということをしています。

結局、その大元にあるのが、「空」という「存在の源泉」であるということです。その源泉に帰るための手法が、「祓い」という古来の浄化法でした。

7. 日本人のための成功法とは

(1) 神道と仏教に学ぶ

先ほど「空」になること、そして、そのために「祓い」という手法があることを明示しました。この「祓い」こそが、禪の修行で何十年かかる道を最短で実現する日本古来の知恵といえます。けれども、そのように便利なものでありながら、なぜこれまでクローズアップされてこなかったのでしょうか。

これは仏教もそうですが、神道も同じように形骸化の道を辿ったことが原因です。今では仏教も神道も、ただ「拝む」ものということになっています。残念なことに、本職のお坊さんも神主さんも、ほとんどの方がこの本当のことを知りません。

そもそも「拝む」の語源は「おろがむ」であり、「愚かな行為をする」という意味が背景にあります。また、「祈る」はほとんど「拝む」と同じような意味に使われますが、こちらも元の意味は「意宣る」であって、何かをお願いする「こと」ではないのです。つまり、「自分の意志を宣言する」という意味であり、決意表明であるわけです。そこで力を発揮するのは、目の前にある神殿や仏像ではなく、自分自身の言葉、言霊です。

ここではつきり仏教と神道の違いを申し上げますと、仏教が「空」に至る道を説くのに対し、神道は「空」から階層を下って現象界を創造する道を示します。そのため、禅のように時間をかけて「空」を掴むなどという暇（いとま）はないのです。

（2）すべてを捨てて「空」になる

では、日本人にとって最も取り組みやすい成功法とはどのようなものでしょうか。本稿の冒頭でも述べましたように、ここでもいう成功法とは、いわゆるお金持ちになるという視野の狭いお話ではなく、「言葉を現実化させる方法」という意味です。

ここまでお読みの方は既におわかりかもしれませんが、日本人のための成功法、その原点は「捨てる」ことにあります。つまりこういうことです。①捨てる、②空っぽになる、③言葉を出す、簡単にいうとこれだけです。

なぜそれが「日本人のため」といえるかというと、日本人＝日本語族は民族的にも歴史的にも「捨てる」ことが得意だからです。このような言い方は語弊があるかもしれませんが、武士道でも先の大戦でも、名誉や国のためであれば、命すら捨てることのできる民族です。もちろん、それがいいこととは思いません。

ここで何を言いたいかといいますと、「全てを捨てても残るものがある」ということをある種遺伝的に「知っている」ということです。よく死んでも魂は残るといわれますが、それもまだ浅い世界です。そこで残る究極のものが実は「空」なのです。

その「捨てる」行為を祓いて行い、祓った後に言霊で現実創造をしてきたのが、日本の天皇家です。あまり知られていませんが、上代日本の歴史を知った明治天皇が最も熱心に取り組んだのが言霊学です。

話はいったい偏った方向にいつてしまいましたが、この①捨てる、②空っぽになる、③言葉を出すという一連の流れは是非覚えていただきたいと思います。

このように、今の自分を省（かえり）みず、いきなり知識やテクニックを身

に付けようという行為がいかにも本来の道からずれているか、いかに本来の道に反しているかお分かりになると思います。

ただし、これは成功哲学だけでなく、どの世界も同じであり、芸術の世界でもテクニクを身に付けて絵をうまく書こうとか、いろいろありますが、最後は必ず自分という存在に戻ってきます。一見、テクニクを身に付けるとか、役に立つ知識を頭に入れるという行為は人生の近道のように見えますが、自分のあり方を省みないという点において、決定的なマイナス面があることを忘れてはなりません。

(3) 江戸時代の骨董商に学ぶ

一つ例を出しましょう。かつて、江戸時代の骨董商には独自の修行法がありました。骨董商の元には贋作、真作含め、様々な物が持ち込まれます。そのため、本来、その真贋を見極める目がないと仕事にならないというのが、当時も今も変わらない条件です。

その修行法とは、目の前に本物の価値のある壺を置いて、ただひたすらそれを見る訓練です。その訓練に終わりはなく、あるレベルに達したら合格となり、晴れて実際の仕事に携わることができます。ただし、どうがんばっても、時間をかけても、一定レベルにいかない場合には、そこで別の下働きをするか、他の仕事を探すかになります。

この修行法の眼目は、壺と一体化することにあります。最初の段階ではただ見るだけですが、それをひたすら行くと、目で見るというレベルから心の眼で見るというレベルに移行し、最後は自分が壺か、壺が自分かわからなくなるといいます。

そうすると、目で見た表面的な情報だけでなく、その壺の成り立ちまでが情報として自分の身体のように感じます。当然、贋作が置かれれば、仮にそれがどんなに精巧であったとしても瞬時に見抜くことができるというわけです。

これをテクニクと考えれば表面的な判断基準で学習は終わることになりますが、「あり方」存在」という次元で見た場合には、あらゆる情報がそこに含まれることになります。

もちろん誰もがそのようにできるといわけではないでしょう。けれども、骨董商だけでなく、他の仕事においても、江戸時代にはこれに類した方法が採用されていたようです。これは、昔の日本人が「やり方」ではなく「あり方」を重視していたことを示すいい例です。

ここでの流れは、次のように見ることができます。①自分を捨てる、②「空」になる、③事物と一体化する、ということです。自分の思考や価値観、経験則を残したまま、③にいくことはできません。なぜなら、それが残った状態でいかに壺と一体化しようとしても、全て「自分」という色メガネを通して歪んだ真実を掴むことになるからです。

ここで皆様にお伝えしたいことは、①捨てる、②「空」になるまでの手順が、決して特別なことではなく、また極端に難しいことではなく、町で商いを行う普通の人が普通にやってきたという事実です。あとは、②の状態から言葉を出すということがスムーズにできればいいわけです。

（４）「空」から言葉を出すということ

大分前置きが長くなりましたが、日本人のための成功法、それは、簡単にまとめると、自らが「空」になって「言葉」と一体化すること。たったこれだけです。

これまで成功哲学をはじめ、宗教界、スピリチュアルの世界で様々なことが言われてきました。「この言葉がいい」、「いや、あの言葉こそ真実だ」、「この御札を持てば」、「あの幾何学図形に秘密がある」など。そのどれもが、最も肝心な手順を抜かしたものとなっています。

今度は同じことを別の言い方で表現します。その肝心な手順には、段階が二つあります。①自分↓ゼロ、②ゼロ↓言葉、の二つです。これをつなげると、「自分↓ゼロ↓言葉」となり、圧縮すると「自分↓言葉」となります。つまり、一般の教えには間（あいだ）のゼロが抜けていることがおわかりになると思います。

冗談みたいなお話ですが、「間抜け」とは、この「間（ま）」にある「ゼロ」が抜けていることでもあります。ですから、先ほど紹介したような教えは皆、「間抜け」となります。

元々日本人はこの「間」を大切にしてきた民族なのですが、その意味も力も忘れ去られようとしています。なぜなら、虫の音が雑音にしか聞こえない欧米人にとって、「間」とは「無駄」以外の何物でもないからです。その欧米から入ってきた知識や考え方をこれまでありがたく受け取ってきました。

ところが、実はこの「間」こそが力の源泉であり、日本人が大事にしてきたもののです。そして、「間」によって人々が団結し、奇跡を行ってきました。一見何もなく、ゼロであり、休息に見えるこの「間」に「空」があります。

では、「空」から言葉を出すとはどのようなことでしょうか。普段私たちが話をしている時の出し方とどう違うのでしょうか。それとも同じでしょうか。

それは、同じともいえませんし、違うともいえません。厳密にいうとキリがありませんが、単純にはこういうことです。その人の「存在」から出た言葉は近く、それ以外の借り物の言葉は遠いということです。別の表現をすると、確信のある言葉か、そうでないかの違いです。

一体、私たちは普段、どれだけ確信を持って言葉を話しているのでしょうか。ほとんどの場合、自分という根本存在の外側（あるいは上っ面）を流れる、肉体レベル、感情レベルの層から反射的、気分的に話をし、借り物の知識や、人から信じ込まされた内容を、自分のものとして話していないでしょうか。自分が自分に語る場合も同様です。

こうしたことにあまりにも慣れ過ぎて、何が「確信ある言葉」か見極めずらつかないかもしれません。けれども、現代人にとって特徴的な「確信ある言葉」があります。それは、「私は不安だ」というものです。

自分という存在の源が「不安」や「不満」という言葉に力を与え、それらにガッチリ結びついているので、表面上いかに立派な言葉を口にしても、ただひたすら「不安」な現実を目の前に出すしかありません。これはある種の法則であり、「空」のエネルギーに結びついた言葉は実現するしかないのです。

「確信ある言葉」とは別の表現をすれば、自分が心底納得する言葉ともいえます。よくあるケースですが、本当は（つまり存在レベルから）そう思っていないのに、「私はあれになりたい、これになりたい」という方がいます。よくよく聞いてみると、「そうなるとお金がたくさん入るから」とか、「それをやると

人に認めてもらえるから」と言います。普通に考えても、これではうまくいくわけがありません。

一方、「私は本当にこれをやりたい、こうなりたい、それが子供の頃からの夢でした」という方もいます。その場合、ある程度、心の奥から出た言葉であることはわかります。しかし、どこまで奥底かという問題が問われます。結局、本人が認識しているにせよ、そうでないにせよ、その人にとっての本当の言葉が実現するというだけであり、偽物の言葉は現実化の手前でどんどん淘汰されていきます。

(5) 確信のある言葉を出すために

あえて口に出すことで自分を元気づけるという方法もちろんあります。つまり、本当はそう思っていないけれども、それを認識した上で、逆の言葉を発して状況を変えろという方法です。短期決戦ではこれらも効果がないわけではありません。

しかし、人生という長丁場で考えたらどうでしょうか。短期的にいいことがあっても、長い目で見れば、失敗のきっかけになることもあります。また、瞬間的に悪いことであっても、実は人生を豊かにするための出会いを後で作ってくれるかもしれません。

これらはすべて、その人が確信ある言葉をどのように所持し発信しているかによります。人間は大変複雑な存在です。見た目は楽天的でも心は悲観的かもしれません。あるいは、見た目は普通でも、その奥底には楽観的な言葉が詰まっているかもしれません。また、表面上も心の中も楽天的でありながら、奥の奥には、逆の言葉が眠っている場合もあります。

こうして人間は多層構造できており、先ほどお話ししましたように「自らが『空』になって『言葉』と一体化すること」と単純に言っても、次にどうしたらいいかわからないとその先に進むことができません。

そこで、考えていただきたいことがあります。質問が二つありますので、それにお答えください。テーマは、自分にとって確信のある言葉とは何か、です。

○では質問です。あなたが本当にやりたいことは何でしょうか？

・・・・恐らく最初はこれまで思い描いてきた様々な光景を思い浮かべることでしょう。それはどこか外国に行く光景であつたり、職業であつたり、人々から賞賛されているシーンであるかもしれません。あるいは大切な人と静かな時間を過ごしているという映像かもしれません。とにかく、今の自分が本当にやりたいということを言葉にしてみてください。

一度その言葉ができたなら、本当にそうか、もう一度読み返してください。ひよっとしたらもっとやりたいことがあるかもしれません。また、これをやるとお金がかかるとか、そこまでの能力がないから、などという理由で勝手に制限を設け、本当にやりたいことを誤魔化しているかもしれません。

とにかく条件を付けずに、本当にやりたいことを考えてください。何でもいいのです。

○今度は書いた内容が本当に達成できたとします。そして、今あなたは正に死の直前にあります。ここに書いたことを本当に達成した自分を見て何と言つてしまうか。

説明はあえてこれ以上しません。なぜなら、本当の言葉をここで出すことができたなら、それは自分でわかるからです。少しでも疑問があれば、それは人に言われるまでもなく、当の「自分」がそうとわかるからです。結局のところ、自分で自分は誤魔化せません。死の瞬間に後悔が残るようであれば、それは本当に自分のやりたいことではないのです。

もちろん、最初からうまく人もいれば、空回りして堂々巡りを繰り返す方もいるでしょう。その場合は、一人落ち着いた空間でもう一度真剣に考えてみてください。何度やっても、誰も咎めません。

ここで出る本当の言葉、真（まこと）の言葉が言葉です。本物の言葉が出る時、それは自分の口からだけでなく、自己の存在全体がそれを口に行っていることとお分かりになると思います。その内容にいい悪いありません。大切なことは、それが本物かどうかだけです。

本当の言葉とは、それが自分の「あり方」存在」に繋がっているため、自分の（心の）耳には聞こえなくとも、四六時中出している自分の声でもあります。

したがって、西洋の成功哲学のいうようなアファメーション（同じことを繰り返し念じること）は、本来必要ないのです。

もし、自分の本当の声に背（そむ）く形でアファメーションをするとしたら、どちらが勝つかは考えるまでもないことです。一方、アファメーションで成功したという方は、それが実際に本当の声と一致していたということです。

（6）本当の自分を知る、そして祓う

先ほどご自身が本当にやりたいことを書いていただきました。正直、どこまで書き切れたかは人それぞれであり、まだそこ（本当の自分の言葉）に到達できていない方もおられることでしょう。焦る必要はありません。

けれども、その過程において何か気づくことはなかったでしょうか。それは、「自分が本当にやりたいこと」には、自分の「あり方」が密接に関わっているということだと思います。その自分の「あり方」を素直に認めることが、最初の第一歩になります。

皆さん、認めたくはないかもしれませんが、先ほど申し上げましたように、自分に正直に向き合うと、自身の本当の姿は「不安」そのものであることがわかりになると思います。普段はそれを隠すために、あえてそれを心の奥にしまい込んで、自分でも忘れたフリをしようとしています。しかし、本当の自分は知っています。それがいつもあることを。

もちろん、なかには、「不安」ではなく、正直に向き合った結果、「喜び」や「希望」という言葉しか出てこないという方もおられるでしょう。それはそれで結構です。現実がそれに見合ったものになっていれば、余計なことを考えず、そのまま前に進むこともできます。

けれども、どんな方でも多かれ少なかれ「不安」という言葉は、「あり方」の世界に張り付いているはずです。なぜなら、この四次元という世界で生きる限り、「安心」の裏には「不安」があり、「喜び」の裏には「悲しみ」が必ずセットで存在するからです。この法則からは逃げようがありません。

そこで、こうした「不安」や「悲しみ」、「絶望」という、粘着テープで心に貼り付けられた言葉を、そこから剝がして、丸ごと別世界に流してしまおうと

というのが、いわゆる「祓い」の技法です。「不安」というマイナスの言葉であれ、「喜び」というプラスの言葉であれ、それが四次元界の言葉である以上、二項対立の揺らぎから逃れることはできず、それらが創造の言語として一元化しない限り、安定的に力を持つ言葉にはなりえません。

要はこういうことです。祓いとは、「不安」という言葉も祓いますが、「安心」という言葉も同時に祓うということです。その両方を祓うことで、そのマイナスとプラスを超越した「空」の世界にアクセスできるということです。「空」の世界、それは「五次元」の世界であり、四次元宇宙をコントロールできる「意志」の世界です。

したがって、もし自分の中に「不安」という言葉が出てきたら、そこから逃げるのではなく、しっかりそれが自分にあることを認めます。そして、その反対の言葉を思い浮かべます。（この場合は「安心」ですね。最初はイメージで結構ですので、その両方の言葉を一緒に「捨てる」と意図してください。意図したその瞬間、何かが空っぽになった感じがします。微妙な感覚ですが、これまでの自分の世界と異なる空間を感じるかもしれません。実は、その「空」の場から言葉を出すのが言霊実現のポイントになります。（ただし、練習は必要です。）

一方、これらの操作を言葉でまとめて行うのが、いわゆる祓詞（はらひことば）です。

最も祓いの力を持つとされる「中臣祓（なかとみのはらひ）」は、その祓詞の中で何を言っているかご存じでしょうか。「罪という罪を階層に分けて水に流せ」と言っているのです。これを上記に当てはめると、「二項対立の言葉を四次元階層の言葉として識別して流せ」ということです。

「分ける」とは「わかる」ことであり、問題が「分かる」から流せるのです。階層に分けて問題を言語化できなければ、流しようがありません。いつまでも見えない力に支配されてしまいます。私たちは「安心」といいながら、その裏にある「不安」に支配されているのです。

「中臣祓」は階層に分けてゴミを流す手法を祓詞という日本語にしたものであり、仮に明確な意味がわからなくとも、唱えるだけで心身のお清めができるある種「魔法の言葉」です。その言葉は、古来より五次元の自分に働きかけ、

言霊の働きで自動的に祓いを起こすとされてきました。事実、今もこの詞で様々な奇跡が起きています。

この章の最後にもう一つ言わせていただきます。実は、誰でも五次元の言葉は持っています。それは、いわば、死の直前に人生の全局を目の当たりにして自分にかける言葉にも近いものです。しかし、普段あまりにも大量の言葉のノイズが自身の内外を飛び交っているため、本当の自分の言葉に気づかないのです。そうしたノイズを祓うのが祓詞でもあります。

以下に中臣祓を紹介します。

中臣祓

高天(たかま)の原(はら)に神留(かむづまり)座(ます) 皇親神漏岐神漏(すめむつかむろぎかむろ)美(み)の命(みこと)をもて 八百萬(やほよろず)の神(かみ)等(がみ)を神集(かみあつめ)に集給(あつめたま)ひ 神(かみ)議(はかり)に議(はかり)給(たま)ひて 吾(あが)皇(すめ)御孫(みま)の尊(みこと)をもて 豊(とよ)葦原(あしはら)の水(みづ)穂(ほ)の國(くに)を 安國(やすくに)と平(たいら)けく所(しろ)知食(しめせ)と 事依(ことよさ)し奉(まつり)き 如(かく)此依(よさ)し奉(まつり)し國(くに)中(なか)に 荒振(あらぶる)神(かみ)等(がみ)を 神(かみ)問(とわ)しに問(とわ)し給(たま)ひ 神(かみ)掃(はら)ひに掃(はら)ひ給(たま)ひて 語問(こととい)し磐(いわ)根(ね)樹(こ)立(たち)艸(かや)の片(かき)葉(は)をも語止(ことやめ)しめて 天(あま)の磐座(いわ)押(い)わくらおし放(は)なち 天(あま)の磐(いわ)戸(と)を押(おし)開(ひら)き 天(あめ)の八重(やえ)雲(ぐも)を伊豆(いず)の千(ち)別(わき)に道(ち)別(わき)て 天降(あまくだ)し依(よさ)し奉(まつり)き 如(かく)此依(よさ)し奉(まつり)し四方(よも)の國(くに)中(なか)に 大倭(おおやまと)日高(ひだか)見(み)の國(くに)を 安國(やすくに)と定奉(しずめまつり)て 下津(したつ)磐(いわ)根(ね)に宮柱(みやはしら)太敷(ふとし)立(たて) 高天(たかま)の原(はら)に千木(ちぎ)高知(たかしり)て 皇(すめ)御孫(みま)の尊(みこと)の美頭(みづ)の御舍(みあらか)に仕奉(つかえまつり)て 天(あめ)の御陰(みかげ)日(ひ)の御陰(みかげ)と 隱(ふか)く座(まし)て安國(やすくに)と平(たいら)けく所(しろ)知(し)食(め)す 國中(くになか)に成(なり)出(い)づる天(あめ)の益人(ますひと)等(ら)が 過(あやまち)犯(おか)しけむ(ん)雑々(くさぐさ)の罪事(つみこと)咎崇(とがたたり)天津(あまつ)罪(つみ)とは 畔放(あはなち)溝埋(みぞうめ)樋放(ひはなち)敷蒔(しきまき)串(くし)刺(さ)し 生剥(いきはぎ)逆剥(さかはぎ)糞屎(けがし) 許々(ここ)太

(た)久(く)の罪(つみ)を天津(あまつ)罪(つみ)と法別(のりわけ) 国津(くに)つ(罪(つみ)とは 生(いき)の膚断(はだだち) 死(なをる)の膚断(はだだち) 白人(しらひと)胡(こ)久美(くみ) 己(おの)が母(はは)を犯(おか)し 己(おの)が子(こ)を犯(おか)し 母(はは)と子(こ)と犯(おか)し 子(こ)と母(はは)と犯(おか)し 畜(けもの)犯(おか)せる罪(つみ) 昆虫(はうむし)の災(わざわ)ひ(い) 高津(たかつ)神(かみ)の災(わざわ)ひ(い) 高津(たかつ)鳥(とり)の災(わざわ)ひ(い) 畜(けもの)たおし蟲(まじ)物(もの)せる罪(つみ)を地津(くに)つ(罪(つみ)と法(のり)別出(わけいだ)して 許々(こゝろ)太(た)久(く)の罪(つみ)出(いで)む(ん) 如(か)此(こ)出(いで)ば 天津宮(あまつみや)の事(こと)を以(も)て 天津(あまつ)金木(かなぎ)を本末打(もとすえうち)切(きり)て 千座(ちくら)の置(おき)座(くら)に置(おき)足(たら)は(わ)し天津(あまつ)清(すが)麻(そ)を 本末苅断八津(もとすえかりたちやつ)針(はり)に取(とり)辟(さ)して 天津(あまつ)祝詞(のりと)の太(ふと)祝詞事(のりごと)を以(も)て宣(のり)る 如此宣(かくのら)ば 天津(あまつ)神(かみ)は天(あま)の磐(いわ)戸(と)を押(おし)開(ひら)き 國津(くに)つ(神(かみ)は高山(たかやま)短山(ひきやま)の伊穗(いほ)理(り)を撥(かき)別(わけ)て洩(も)るる処(とこ)無(な)く聞(き)食(しめ)さむ(ん) 如此聞食(かくきこしめ)しては 種々(くさぐさ)の罪(つみ)は不在(あらじ)と 科(しな)戸(と)の風(かぜ)の天(あめ)の八重(やえ)雲(ぐも)を 吹(ふり)放(はろ)ふ(う)如(ごとく) 朝夕(あしたゆうべ)の霧(きり)を 朝夕(あしたゆうべ)の風(かぜ)の吹拂(ふきはろ)ふ(う)如(ごとく) 大津邊(おおつのべ)に居(いる) 大船(おおふね)の舳(とも)艫(べ)の綱(つな)を解放(とき)はなち 大海原(おほうなはら)へ押(おし)放(はな)つ如(ごとく) 彼方(おちかた)や繁(しげき)が本(もと)を焼(やき)鎌(がま)の砥(と)鎌(がま)を以(も)て 打拂(うちはろ)ふ(う)如(ごとく) 残(のこ)れる罪(つみ)は不在(あらじ)と 祓(はら)ひ清(きよ)むる事(こと)を 高山(たかやま)短山(ひきやま)の末(すえ)より 佐久(さく)良(ら)谷(だに)に水落(みずおち) 瀧(たき)壺(つ)早川(はやかわ)の瀧(せ)に流(なが)し座(ます) 瀬(せ)織(おり)津(つ)比(ひ)咩(め)と云(い)ふ(う)神(かみ) 大海原(おほうなはら)に 持出給(もちひでたま)ひてむ(ん) 如(か)此(こ)持出給(もちひでたま)ひなば 荒(あら)潮(しほ)の潮(しほ)の八百(やほ)道(じ)の八(や)汐(しほ)道(じ)の潮(しほ)の八百會(やほへ)に座(ます) 速(はや)開(あき)都(つ)比(ひ)咩(め)云(ちよ)ふ(う) 神(かみ)齟(かみ)吞(の)みてむ(ん) 如此(かく)齟(かみ)吞(のん)では 吸吹(いぶき)戸(ど)に座(ます)神(かみ) 息吹(いぶき)放(はな)ち給(たま)ひてむ(ん) 如(か)此(こ)息吹(いぶき)放(はな)ち給(たま)ひては 根(ね)の國(くに)の底(そこ)の國(くに)に鎮(しづま)り座(ます)神(かみ) 佐須(さす)良(ら)ひ(い)失(うしな)ひ(い)

給(たま)ひてむ(ん) 如(か)此(く)佐須(さす)良(ら)ひ(い)失(う)しな(ひ)(い)
給(たま)ひては 残(の)これる罪(つみ)は不在者(あらじもの)ぞと 祓(はら)
ひ申(もう)し清(きよ)め申(もう)す事(こと)の由(よし)を 天津(あまつ)神
(かみ)地津(くに)神(かみ)八百萬(やほよろず)の神(かみ)等(がみ)に 平
(たいら)けく安(やす)らけく 御(み)いさみ給(たま)ひて聞(きこ)食(しめ)せ
と申(もう)す

この祓詞を唱え、「空」になった後に、「祈り」意宣(いの)り」を行うこと
で願いが叶うといわれます。

(注意…この中臣祓は、歴史的にも大変強力な祓いであるため、あくまで参考
資料としてご紹介しています。そのため、この詞を唱える場合は、しかるべき
指導者の下、結界の内側のような清浄な空間で行うことをお勧めします。また、
夕方以降の奏上はできるだけご遠慮ください。)

今回祓詞の仕組みをはじめ、こうした形で古代日本の叡智を公開するのは初
めですが、末法の極みにあって、私たち日本語族の覚醒が求められる今、「公」
の視点から敢えて公開させていただきました。

(7) 神道とは神と人とのコミュニケーションプラットフォーム

祓いにより自身が清浄化されることはおわかりいただけたかと思います。そ
して祓われた状態から言葉を出すことが、物事の現象化にいかに必要なかもご理
解いただけたのではないでしょうか。

そもそも神道とは、結界の中で神と人間とがコミュニケーションを取ること
を意味します。そのためには人間が穢れを落とし、透明で清らかな状態にある
ことが求められます。神とは言霊そのものであり、人間が神とつながることで
言葉はそのまま現実となるのです。その時に人は、自分自身が実は神の一員で
あったことに気づくのかもしれません。

ところで、この現象化に関わるもう一つの要素が「産霊(むすひ)」という概
念です。「はじめに言葉ありき」はその通りですが、それだけで現象化は起きま
せん。言霊により振動(周波数)が発生し、そこに文字通り「産霊」結び」が
起こることで初めて四次元の世界が立ち現れるのです。

人間の世界でも「結び」は欠かすことのできない概念です。人と人がコミュニケーションを取ることで別々の人間同士が結ばれ、そこから新たな展開が生まれるというわけです。つまりここで言いたいことは、神と人とのコミュニケーションもさることながら、人と人とのコミュニケーションも同様に重要であるということです。

よくスピリチュアル系の方で「私は上とつながっているから別に人と交わらなくとも幸せ」という方がいますが、そのような方に現実を変える力はありません。ましてや現文明に影響を与えるなど夢のようです。

神とは自分であり他人であるという考え方ができれば、コミュニケーションの重要性についても新たな理解を持つことができるでしょう。コミュニケーション、それは、話がうまくいか、しゃべりが滑らかだとか、声がいいとかいうことではなく、人や物に対して心を開いているかどうかを明らかにするものであるということです。

8. 新しい時代の成功法（五次元とコンピュータの活用）

（1）知識の世界と体験の世界

これまでアナログにおける方法論のいくつかを紹介させていただきました。なるほどと思うものもあれば、合点のいかないものもあるかと思います。ただこれは、よく使う譬えなのですが、自分が体験すれば「な〜んだ」というものであっても、そうでない人には、全く想像すらつかないケースがあります。

たとえば、ここにリンゴがあります。リンゴを見たことも食べたこともない人にどこまでリンゴの説明ができるでしょうか。「これは食べるもので、色は赤で、大きさは大人の拳より少し大きくて、皮を剥いて食べてみると、甘くて、酸っぱくて、サクサクしていてもおいしいものだよ」と言ったとしても、この説明は食べたことのある人には通じて、そうでない人には、大ざっぱなイメージが伝わるのみで、当然実感はないはずです。しかし、一度でも食べればわかります。それが説明通りであったということ。

このように、先ほどまでご紹介した内容は、まだ食べたことのないリンゴの話をしているようなもので、想像はできても、まだ雲を掴むようなお話かもしれません。けれども、そのどれかを実際に体験することがあれば、なるほどと分かる部分も出てくるはずですよ。

そのような意味におきまして、頭で理解できないからといって、食べることを拒否すれば、いつまでたっても分かることはありません。逆に、自分の頭で簡単に理解できると早合点することは、逆に、そのレベルの範囲内であり、決して今の自分を超越することができないということでもあります。

よく「こんなことはもう知っている」ということで、それ以上の探求を拒む方がいますが、先の譬えでいうと、リングを食べたこともないのに、リングの知識だけあるというようなもので、世の中そうした人が幅を利かせていることにびっくりし、またあきれます。

とまれ、今度は更に別の視点からお話をさせていただきたいと思います。

(2) アナログとデジタル

これまで心の問題は、すべてアナログで処理されてきた歴史があります。また、自分の力で苦勞をして、それを乗り越えるのが正しい道であるといわれてきました。基本路線はその通りであり、それを否定する気はありません。

私もこのアナログの世界、また修行の世界に生きてきました。自分なりにですが、それにより、思考の限界、肉体の限界を垣間見ることができました。どの場合でも、自分の目標を達成できた時には、「自分」の力で乗り越えたという充足感に満たされ、喜びも一入（ひとしお）でした。

しかし、あるところで限界がやってきます。これは今にして思うと四次元の限界ともいえるのですが、最後の最後に自分を超越することができないのです。結局は「自分」が完全に抜け落ちたところに答えを見つけるのですが、そこで思ったことがあります。これは時間の問題ではないな、と。今まで気づかなかっただけなのです。

では、時間をかける意味はどこにあるのでしょうか。知識を蓄積するのであれば、時間はあった方がいいのですが、五次元に抜け出るためには、四次元のすべてを捨てる必要があります。ということは、蓄積が無駄であるということを知るために時間が必要ということになります。うまくいけば、その時間も無駄ではなかったと言い訳できますが、そうでない場合は人生を棒に振るようになります。

こうして思うことは、時間を圧縮できれば修行はもっと早く終わるはずだということであり、そもそも修行は必要なのかという疑問です。逆に「修行しなければ」という強迫観念のフィルターが消えると、あっさりわかる世界もあります。この「修行」という言葉を「努力」に置き換えてもいいでしょう。

もう一つは、努力をすればするほどエゴが強くなるという自分を見た、ということです。自分は人よりがんばっているという思いが、ある種の優越感を引き起こし、楽をしてがんばらない人を見て、ダメ人間と決めつけていた時期もありました。（実際は自分こそそうなのですが）また、それにより、他人に対する要求も厳しいものになっていました。

そこで再び思うことですが、そうした態度は果たして平和的かどうかということです。努力をすること自体は悪いことではないのですが、それによって、偉そうにしている自分はどのようなのでしょうか。今でも思い出すと恥ずかしくります。

アナログ（人間）ではなくデジタル（機械）の世界に出会ったのは、そんな自分へのお試しだったかもしれません。デジタルで悟れる？ デジタルで現実を変えられる？ そんな話があつていいのか、というのが最初の印象でした。こんなに皆苦労してやっと掴んでいるものがあるのに、そんな嘘みたいな話で、楽をして掴んでもいいのか、と。

けれども、それが本当であれば試したいという自分もいました。それを邪魔していたのは、それまでの偏った価値観です。本当の意味でそこを抜け出するのに、一定の時間が必要でした。

そしてある時気づきました。「自分の力で何とかしようとするからこそ、エゴなんだ」と。結局、自分の力でやったということを人に言いたいんだな、ということがわかりました。それから急速にデジタルの世界に目を向け始めます。

（3）世界はデジタルで動いている

恥ずかしいお話ですが、私が携帯電話を持つようになったのは、今から十年前のことです。仕事が忙しい中、当時携帯を持たないことで既に変人扱いされていました。周りの方々に迷惑もかけていたと思います。先ほどもお話ししまし

たように、機械に頼るのは元々邪道であると考えていました。しかし、長女が生まれ、緊急時に必要ということで嫌々所持したのが最初です。

もちろん、現在は何でも最新のものを持つよう心掛けているわけですが、デジタルの世界に目を向けて啞然としたことがあります。それは、デジタルなしに今日の世界は成立しえないという（極めて当たり前の）事実です。

当たり前すぎて気づかないともいえるのですが、電卓ですら欠かすことのできないものです。電車も自動車もコンピュータ制御されており、そのシステムがないと全く機能しないという状況です。それだけではありません。今や炊飯器や洗濯機ですら、それらを不可欠としています。逆にデジタルの入り込んでいない世界を見つける方が難しくなってきました。

パソコンも年々進化し、今では自分の記憶にないものは、すべてパソコンにデータ保存してあるという状況です。Googleなどの検索エンジンに至っては、これまで分厚い辞書を何冊も本棚に置いていたのが、インターネットにつながる環境さえあれば、何でもわかってしまいます。新聞も必要ありません。下手に知識がある人よりも、検索名人の方が重宝される時代です。

そんな中であって、金融工学の発達には目を見張るものがありました。三つの番組でもかつて「変わる一秒の重み」という番組がありました。株の自動取引では一秒間に数万回の、あるいはそれ以上の取引ができるとのこと。どうやってアナログの人間がそれに勝負できるのでしょうか。

これは、つまり、人間がそのスピードについていくため、常に意識や脳の高速学習を行っていなければならないことを意味します。二〇四五年問題（人類がコンピュータに支配されるという問題）を待つまでもなく、既にその戦いの火ぶたは切って落とされているわけです。

行きすぎたコンピュータ化問題を否定するのは簡単です。また、その気になれば、自給自足の田舎暮らしに走ることもできます。けれども、私たちの文明は、これが現実であり、そこから逃げることは、同時に何かに追いかけられるということでもあります。

そのため、「世界がデジタルで動いている」ということに目を背（そむ）けず、正面から向き合うことで、新たな時代が切り開けると考えるようになりました。

(4) 言葉を機械で発信すること

生の歌声がレコードに記録され、カセットテープになり、CDになり、MDになり、やがてコンピュータの記録媒体に録音できるようになりました。そこで再生される音は、基本的には生の声そのものであり、歌い手が目の前にいなくとも、その声や音を聞いて感動することができます。今どき、音楽は目の前で演奏するのが正しくて、録音の再生は邪道だという人はいないでしょう。最近ではボーカロイドで作成された機械音声のCDも堂々と売られています。

同じように、人間の言葉も、生の声を録音＆再生することもできれば、ボーカロイドのように、音声をデジタル的に合成し再現することができます。言葉を機械から発信するという仕組みは、もちろん、これと同じではありませんが、発想としては似たようなものがあります。

たとえば、祓詞を例に考えますと、これを人間の言葉で行うといわゆるお清めの効果が人間や土地に現れます。その際に、何人かで実験すると、誰の声がいいというのが出てきます。今度はそれを録音し、再生してみます。すると、人間ほどでなくとも、ある一定の効果が出ます。ただし、人間の場合、感情エネルギーという余計なものが入るので、ボーカロイドで祓詞を作ってみます。するとどうでしょう。下手な人間よりも効果が高かったりします。(実際、祓詞は感情が入らない清らかで平らかな声ほどよいとされます)

今度はより本格的な機械について考えます。人間が声を出す時にある種の周波数が出ることは以前からわかっています。いわば耳に聞こえる前の状態です。日本語の一音一音はそれぞれが固有の周波数を持っているため、それらの集合体である文章も、同様に周波数に変換して発信することができます。

では、人間がそうした周波数を浴びるとどうなるでしょうか。実は、音がなくとも、それを浴びた人間にはその周波数に誘導されたとか考えられない特定の変化が起きるのです。

簡単にいうと、言葉とは周波数そのものであるということです。このようにいうと単純に聞こえるかもしれませんが、その周波数を一音一音特定するまでに約二十五年の歳月がかかりました。数多くの実験を重ね、都度修正を加え、また発信方式を変更したりしながら、現在ある結論に達しています。

それは、発信のスピードが速ければ速いほど、（当然同じことを繰り返し発信できるため）言語周波数による対象物への影響が大きいということです。もちろん、現在採用している方式が最善ということではなく、更に効果的な方法を現在も追求中です。

これまでに行った実験内容やその結果はともここに書き切れませんが、ある時代に日本の中心で行われていたご祈祷の内容は、ほぼ全て実験に成功しています。しかしながら、機械から声（周波数）を出して現象界を変えするという操作は聞き慣れないことであり、多分に抵抗もあると思いますので、詳細は別の機会に譲りたいと思います。ここでは、そのようなこともあると覚えておいてください。

ではなぜ日本語なのかというと、秘密はこの日本語の三位一体性にあります。つまり、父韻、母音、子音の三つの関係です。父韻とは、五十音をローマ字で分解した場合の、「ksthmyrw」を示し、母音は「aiueo」、子音は力行であれば、「ka,ki,ku,ke,ko」の「k」をいいます。この場合、父である「k」と母である「ai」が合わさって「ka」すなわち「カ」が生まれるのですが、父と母が合わさる時に縦波が発生するのです。この縦波が五次元まで抜けるという点が最大のポイントです。

（5）今、なぜデジタルなのか？

ここでもう一度アナログの世界を振り返ってみます。本稿の前の部分で西洋の一神教についてお話ししました。そこでは、人間は原罪により神になることはできないと教えられます。逆に神の許可を得たとなれば、（実際は人間が勝手に決めているのですが）目的のためには何をやってもいいことになります。

そこにはある種の自暴自棄的な姿が見え隠れします。つまり、周りがどうあれ、目的を達成することがすばらしいと自らを信じ込ませる異様な光景です。その際に実は彼らから罪の意識が消えることはありません。それ故真の成功を果たすことはできず、例外を除き、最後は人から恨まれます。ロックフェラー一族の誰であったか忘れましたが、誰に襲われるかわからないので、ライフルと一緒に眠れないという人物もいます。

つまり、原罪や業（カルマ）という世界は、それほどに影響力があるという

ことであり、それがあゆめ、見かけの成功はできても、誰からも喜ばれる本当の成功はできないのです。こうした罪や業に関する問題は、西洋だけのものではありません。インドや日本にも存在します。しかし、本件に関する限り、これまでの歴史において、アナログで根本的な解決ができたことは一度もありません。

果たしてこれを救う方法があるのでしょうか。そのヒントは『量子進化』(ジョン・マクファデン著)に出ています。つまり、アナログではなく、量子レベルの働きかけで解決できるのではないかということです。またそのような機械の出現も予言されています。

電磁波がDNAに影響を与えるのは、よく知られた話です。とすれば、量子レベルの微細なエネルギーでDNAに眠る先祖のカルマが解消できたとしても不思議なことではありません。仮にある霊能者が一晩かけて、三人の先祖のカルマを除去できたとします。では、何千万という先祖の全てのカルマを消去するのに、一体何年かかるでしょうか。

これは何も特定の人物だけの問題ではありません。世界全体を清浄化するのにどれだけ莫大な時間をかけたらいいのかという問題です。しかし、答えは既にあるのです。

(6) デジタルで成功すること

もし時代が時代であれば、デジタルは不要であり、アナログで全ての問題が解決できるはずですが。しかし、今の時代は、デジタルで極めて便利になっている分野もあれば、それにより、取り返しのつかない事態も起きています。

先の二〇四五年問題を出すまでもなく、人類がコンピュータの有用性に気づいて以降、あらゆる制御をコンピュータに任せるようになりました。全体を見据えての計画であれば問題ないのですが、たとえば、森林を機械的に伐採するなど、環境破壊も著しく進んでいます。また、金融界ではありもしないお金がコンピュータ画面に存在し、その利息を返すために、数々の自然が壊され、未開の地に住む人々が搾取され、不要な商品が世に送り出され、薬品漬けの食物が市場に提供されています。

そのあまりにも目まぐるしいスピードに、精神のコントロールを失い、身体

を害し、職場に復帰できない人も日増しに増えています。結局はコンピュータのはじき出した数字に帳尻を合わせるため、世界中の人々が自分や国の終着点もわからずに、あくせく働いているというのが現状です。

こうしたスピード化の時代に、山にこもって五年、十年修行する暇はあるでしょうか。決してアナログの世界を否定しているのではありません。世界の現実がそうだということです。コンピュータ制御された重機で森林を破壊するのを、人間が一輪車とスコップでどこまで復元できるでしょうか。一秒間に数万回の株取引ができる時代に、一体何人いれば、そのスピードに対抗できるのでしょうか。（因みに現代最速のコンピュータは一秒間に百万回の取引をするといわれます。）

言霊を機械から発信するという発想もそこから来ています。個人の幸せだけを考えるのであれば、機械などいらないでしょう。自分だけで十分にやっていける世界があります。しかし、現在の地球号はある意味、タイタニック号の状態であり、沈む直前の船の中で嬉しそうにステーキを食べるという行為がいに愚かしいことであるか、気づかねばなりません。

よく、言霊の機械で個人的なこんな欲望は実現しますか、と聞かれますが、そんな時には、ステーキを食べる前にもっと全体を見た方がいいですよ、とアドバイスしています。逆に、全体が無事であれば、あとは個人の自由です。言霊は四次元世界では音や文字に姿を変えますが、その実は人類の至宝であり、個人的にそれを利用するという行為はできないことになっています。しかし、全体の繁栄に結びつく個人や法人の繁栄は、その結界を超えることができます。

デジタルであればこそ、その影響力はアナログをはるかに凌ぐものであり、全体設計なしに個人の願望を叶えることはできないと覚えておいてください。これらの成功とは、全体の成功と個人の成功が一致したものになるということです。そこにコンピュータを使った新しい時代の成功法があります。

9. エピローグ

ここまでお読みいただきありがとうございます。前段からあれほど熱心にアナログのお話をしておきながら、それを否定するかのようにな、デジタルの話が出てきたことにびっくりされた方もおられるでしょう。

けれども、今回のお話は、決してアナログを否定しているのではなく、むしろアナログもデジタルも肯定するというスタンスにおいて、その上の階層から、デジタルを有効に活用してこうという試みについて語っています。アナログからデジタルに、左から右に移行するという直線的な移行のお話ではありません。

同様に、西洋の成功哲学に対しても同じスタンスを取っています。つまり、西洋の積み重ねの文化を認め、東洋の伝統文化を肯定しつつも、日本的な和の「あり方」をそれらの上位階層に位置づけ、両者の統合を先進的に果たすものです。

こうした流れの中で、日本人のための成功法則という観点からは、日本人の「あり方」を中心に語らせていただきました。その世界はアナログにもデジタルにも通用するものであり、またなくてはならないものです。

そうした日本人の「あり方」を、「いつか世界がわかってくれるだろう」としつつ待つ方法もあります。しかし、世界がこれほど早いスピードで動いている中で、一体誰が日本に目を向けてくれるでしょうか。

もちろん日本の伝統芸能が世界から再評価されていることはわかります。けれども、それは、私たちがたまに都会から田舎に行って、「やっぱり田舎は落ち着いていいなあ」と言うのと大差ありません。そこに文明を動かす力はあるでしょうか。

今はまだ半信半疑に思うかもしれませんが、これから間違いなく、「個人の幸せ」全体の幸せ」となる時代がやってきます。逆に「自分だけ良ければいい」という考えはますます通じなくなるでしょう。なぜなら、日本語族はそのような民族ではないからです。

人類の至宝ともいえる言霊を自由に扱える民族として、今一度誇りを取り戻し、世界の適正化ができるよう、日本人一人一人が自立して活躍できる日が来ることを願ってやみません。そして、皆様が五次元の叡智を使って、本来の自分の生き方を設計できますよう、心よりお祈り申し上げます

大野靖志



最後までお読みいただき、ありがとうございました。

ぜひ、本書の学び、感想をお寄せください。
大野さんもすべて拝見させていただきます。

本書の感想はこちらのページのコメント欄へお願い致します。

↓ http://the-warp.jp/session/?page_id=81

※大野さんの冊子の感想とご明記いただきますようお願いいたします。